の器形となる。

以上，縄文早期後半の各型式にみられる壺形土器について，その特徴を検討した。第5図は，土器型式の段階ごとにみられる壺形土器の変遷図である。

このように壺形土器はStage 1の手向山式土器期からStage 2 ～ 4を経てStage 5の桙ノ原式土器期へと段階的に継承されるが，Stage 1の段階から壺形土器の器形には長頸壺＝Aと無頸壺＝Bの二通りの器形が確立しているようである。なお，南九州で壺形土器を伴出する平桙様式については，土器の型式組成や編年上の問題など今後の資料の増加に伴って定期的に検討する必要がある。

4　壺形土器の用途と埋納及び埋設の意義について

壺形土器の用途と埋納及び埋設の行為は，相互に関連はあるが，意義については大きく異なることが考えられる。それぞれについて検討してみたい。

（1） 壺形土器の用途について

アカホヤ火山灰の発見以来，これを示準層として南九州の土器型式の変遷がほぼ確立されるに至った。その結果，土器型式の形態は，火山灰層の上・下で大きく異なることも判明した。つまり，アカホヤ火山灰の降灰以前の縄文時代早期には南九州の在地系土器の大きな発達が確認され，降灰以後の前期以降には轟式土器や曽畑式土器など広域な土器型式の南九州への進出がみられる。

このような土器文化の画期的な変化がアカホヤ火山灰層によって明瞭に生じたわけであるが，土器文化の推移から南九州の特異性を引き出すことも可能となった。例えば，早期の段階の南九州と北部九州の石器組成の相違も重要な問題であろう（米倉1984）。こうした南九州の特異性（あるいは独自性）は，縄文文化の地域性として単純に片づけられるものではなく，縄文文化にもっともかかわりの深い自然環境（植生）の変遷が大きく関与していることが考えられる。アカホヤ火山灰の降灰の時期は西日本に照葉樹林が定着した時期であり，考古学上では縄文時代早期と前期の境界と一致する。福井県鳥浜貝塚の調査成果に代表されるように，西日本では縄文前期に照葉樹林の定着にともなって縄文文化の飛躍的な発展が証明された（安田1980）。南九州では，鹿児島県曽於郡志布志町東黒土田遺跡で縄文草創期の貯蔵穴から落葉広葉樹の大量の堅果類が発見されたが（河口 1982），姶良郡栗野町花ノ木遺跡では早期後半の貯蔵穴からイチイガシが出土し（鹿県教 1976），すでに南九州では早期の段階で照葉樹林の実を食料としたことが裏付けられている。このような自然環境の中から南九州は，独自の文化を飛躍的に発展させたことが想定される。植物質加工石器の出土量の高い傾向がみられる南九州は，照葉樹林の環境下において，植物質食料への依存度が高かったことを示唆している。

これらの環境の中から，必然的に壺形土器の器種が形成されていったことが想定される。もちろん壺形土器は，貯蔵の用途が考えられ，木の実の貯蔵のほか種子類の保存が考えられる。これまでのところ壺形土器は南九州地域以外にはみられない器種である。南九州の壺形土器の出土する遺跡からは煮沸用の深鉢形土器が比較的多量に出土しており，壺形土器は深鉢形土器とセットとして存在していることが伺える。福永裕晩は，壺形土器が分布する南九州地域の石器組成に着目し検討を行っている。その結果，磨石・敲石類や石皿などの植物質食料調理具の比重が石鏃などの狩猟具より大きく，定住生活を営む狩猟採集民の生業に必要な石器が出揃ったことを示した（福永 1995）。

このように，壺形土器という新たな器種の出現は，他の地域と異なった社会的環境の成立が考えられる。壺形土器を必要とする縄文社会がいかなるものか興味深いものがある。根拠となる資料は少ないが，壺形土器という器形から種子類や製粉の保存等を想定すると，すでに南九州地域においては植物栽培などの原始的な縄文農耕が行われていた可能性が考えられる。

（2）埋納及び埋設について

これまで埋められているため「埋納壺」と容易に「埋納」の用語を使用する傾向にあったが，土坑等に埋められた土器には，その行為によって「埋納」か「埋設」かの用語は厳密に選択する必要がある。

「埋納」とは，物が人の目に触れないように完全に覆い隠してしまうことである。そして，再び取り出すと，その物は元の機能に戻すことができる。石斧などを地中に一時保管した埋納遺構（デポ）などがその例である。

一方，「埋設」とは，その物をある目的をもって埋めて使用することであり，本来違う目的に使用される物である。埋甕や土器埋設炉などがその例である。

南九州の壺形土器の使用と埋納及び埋設の行為は，それぞれ関連はあるが，異なる行為である。つまり，日常使用する壺形土器と，祭祀的な儀礼を行うために使用した壺形土器では，精神的なものであれ違う用途に使われたものであり，同じ形のものでも使用目的が異なることになる。そのことから，土坑に埋められた壺形土器は，「埋設壺」と呼ぶのが妥当と考えられる。

（3）壺形土器の埋設の意義について

今のところ埋設された壺形土器は，上野原遺跡（第2・6図），城ヶ尾遺跡（第3図），灰塚遺跡（第4図）の3遺跡で確認されている。各遺跡とも埋設された個体数はそれぞれ違うが，完形の壺形土器が土坑内に丁重に埋められた行為は3遺跡とも同じである。

上野原遺跡例は，自然科学分析の結果から，これらの土器は「棺」・「再葬墓」でも「貯蔵具」でもないとしている。そして，土器の中にはススの付着が観察されるものがあることから，土坑内に埋める前に二次加熱つまり火で焚いた行為があったことを想定している。そして，土坑に埋めて